
これってデートだったのか？

マロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これってデートだったのか？

【Nコード】

N1830Q

【作者名】

マロン

【あらすじ】

ある日の休日に出かけた主人公と幼馴染の女の子の話

（前書き）

連載のネタが思いつかず息抜きで書いてみました。

今日は土曜日、学生なら誰しも喜ぶ休日の一日目

そして、俺こと樋口夏樹ひぐちなつきも、そんな休日をダラダラと過ごしていた

だが、そんな休日をぶち壊すアホがやってきた

「夏樹起きろー！ー！ー！」

寝ている、俺に向かってボディープレスをかましてくる一人のアホがいた

「うるせえ！！今何時だと持ってたんだ！優奈！」

俺は、ボディープレスをかましてきた隣の家に住んでいる幼馴染の西本優奈にしもとゆうなに文句を言った

「何時つて、六時でしょ」

優奈は、何いつてんのみたいな顔で答える

「そう六時だ、朝の六時そして今日は土曜日、学校は休みなんだ。だから、俺は今日のんびり寝ていたいと思ってたのに、なぜ俺の睡眠の邪魔をする！」

「いいじゃない別に、早起きは三文の徳っていうし細かいことは気にしない気にしない」

「三文の徳より俺は自らの安眠を願うわ！」

「まあまあ、朝ご飯でも食べて落ち着こうよ」

「朝ご飯ってお前用意してあるのか？」

「え？今から作るんでしょ夏樹が」

「俺が作るのかよ・・・」

「私が作ってもいいけど、夏樹多分死ぬよ」

「喜んで作らせていただきます」

そういえば、こいつは料理できないんだよな・・・前に、何回か料理を教えたけどその度に俺は、走馬灯を見るはめになった

俺の答えに満足した優奈は「よろしい」と一言言つと部屋から出て行き下に降りた

俺もこんな目がさえた状態から再び寝るのは困難だと思い、仕方なく下に降りた

下に降りると優奈が朝食を待っていた

「で、結局なんで俺を起こしたんだ？」

俺がそう聞くと優奈は

「なんとなく」と答えた。なんとなくで俺は、朝の六時にボディー

プレスをくらって起こされたのか

俺は、優奈を人睨みしてキッチンへ向かった

冷蔵庫にあったもので適当に朝食を作り、優奈とともに食べた

「お前、今日部活はどうしたんだよ？」

「今日は、休みなんだよ」

優奈はバスケ部にマネージャーとして入っており部活のやつからの人気は高い

「はぁ、部活ないのかよ」

「なんで残念そうなの」

「部活があればお前も起こしに来なかったんだろうなと思って」

「何、私に起こされるのは不満なの」

「お前の起こし方に不満があるんだ」

「なんでよー!」

「何処の世界にボディープレスで起こしに来る幼馴染がいるんだよ」

「1111」

優奈は、自分に指をさす

「もういい・・・」

これからは、優奈が来る前に起きようと誓う俺なのだった

「夏樹、バスケット部に入ろうよ」

唐突に話題を変えたかと思えば、いきなり俺にバスケット部の勧誘を始めた

「断る！」

「力強い拒否！」

「だって、興味ないし」

「入ってよ」夏樹才能あるよバスケット部入れば確実にエースになれるよ」

「いきなり、俺みたいなやつが入ってエースになったとしてもほかの部員は納得しないだろ」

俺はそう言っただけ残りのご飯を食べ終え食器を片付けに行った

朝食の片付けも終え、今、俺はテレビを見ている。どこかに行こうかとも思ったがさすがに朝の八時じゃどこも開いてないと思い止めた、あいててもコンビニぐらいだし

「暇だな」

俺がつぶやくと優奈は、再びバスケット部の勧誘を始めた

「暇だ暇だって言って、そんなに暇ならバスケット部にも入りなもう
！」

「なんで、お母さん口調なんだよ・・・」

「なんとなくだよ、他にも色々パターンがあるよ聞きたい？」

「いや・・・いいよ」

俺は、嫌な予感がしたので全力で拒否した

どうでもいいやり取りをしながら俺たちはしばらくテレビを見続けた
しばらく、ぼーとしているといつの間にか11時になっていた

「11時か」

俺がつぶやくのを聞いて優奈も時計を見ている

「あ、ホントだ、ねえー夏樹どっか遊びに行こうよ」

「いいでしょ、どうせ暇なんだから」

「分かったよ」

俺は、仕方なく部屋に戻り出かける準備をした

「夏樹どこか行きたい所ってある？」

「ねえよ、お前が出かけようって言ったんだろどっか行きたいんじゃないかったのか」

「別に、夏樹が暇そうだから誘ってあげたの」

「なんだよ、それ・・・」

俺はあきれた

「しょうがない、じゃあ服でも見に行こう」

「はいはい・・・」

俺たちはとりあえずデパート向かうことにした。

デパートに向かっているとき、前の方からチャラ男を具現化したような男二人が現れた

「ねえねえ、彼女こんなやつとしないで俺たちと遊ばない？」

「俺たちと楽しいことしようぜ」

二人は、俺たちの前に立ちはだかるようにして立っている。

正直、邪魔で仕方がない

「あんたらみたいなチャラ男を具現化したようなやつらに興味ないのよ」

優奈、それは言ったら駄目だる俺も頑張ってこらえたのに

「そんなこと言わずにさ、遊びに行こうぜ」

チャラ男Aが優奈を無理やり連れて行こうと腕を引っ張る

「いや！はなしてよ！」

優奈が必死に抵抗している、そろそろ助けないとな

俺はチャラ男Aと優奈の間に入った

「それぐらいにしとけよ」

俺がそういうとチャラ男Aの顔が、ニヤニヤからイライラに変わった

「邪魔してんじゃねえよ！クズが！」

キレるの早！

俺が心の中でツツコミを入れてみると、いままで黙っていたチャラ男Bも口を開き始めた

「お前、あんま調子のとてると殺すよマジで」

今にも、チャラ男A・Bは俺に殴りかかってきそうな感じで俺を睨みつけていた

はあ、めんどくさいなどうしよう

俺は、頭の中で選択肢を考えた

1、戦う

2、返り討ちにする

3、病院に送りにしてあげる

あれ、なんやかんやで選択肢が戦うしかないような・・・

そんなことを考えていると、優奈に腕をひっぱられた

「何してんのよ！こいつらなんか無視してさっさと行くわよ！」

優奈は、俺の腕を引っ張りながらチャラ男A、Bを無視してデパートに向かおうとする

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」

チャラ男Aが俺に向かって殴りかかってきた

「めんどくさいな」

まあ、どのみち俺の脳内では戦うしか選択肢がなかったからいいけど

俺は、殴りかかってきたチャラ男Aの拳をよけて足を引っ掛ける。

チャラ男Aはものの見事にずっこけた

「てめえ、こつちが下手に出てりゃいい気になりやがって！」

今度は、チャラ男Bが殴りかかってきた

「つかこいつら一度でも下手に出てたか、そしてこいつらの中では、
てめえがブームなのだろうか？」

そんな疑問を思いながらも俺は、チャラ男Aと同じようにチャラ男
Bも足を引っ掛けてこかした。

こいつら、こける才能あるな・・・

チャラ男A、Bはこちらを憎らしそうに見ていた

そして、そのまま立ち上がりナイフをとりだした

「てめえ、ぶっ殺してやる」

チャラ男Aがそう言いながらこちらに突っ込んでくる、チャラ男B
もこれに便乗し俺に向かって来る

結果・・・

5秒で勝ちました

「さて、そろそろ行くぞ優奈」

「うん、それじゃーレッツゴー！」

俺たちは、倒れているチャラ男A、Bを無視して再び歩き始めた

なんやかんやでデパートに到着した俺たち

「優奈まずはどこに行くんだ？」

「うーん、服見たいなと思ってただけど、色々あって来るのに時間かかったしお昼でも食べない？」

「そうだな、ちょうどお昼だしそれでいいんじゃないか」

俺たちは、ハンバーガーを買ってその辺にあつたイスに座り食べ始めた

「そういえばさっきは、ありがとうね夏樹」

「何がだ？」

「さっき、からまれた時助けてくれて」

「まあ、隣にいるのに助けないのはひどいからな、気にすんなよ」

「そう言つて、夏樹はいつも私を助けてくれるよね・・・」

「なんか言つたか？」

「なんでもないよーだ、スキあり！」

優奈は、俺のハンバーガーを横から食べてきた

「あっ！俺のハンバーガー！」

「ふうんだ、油断してるからだよ」

「くそ、お返しだ!」

俺は、優奈が持っているハンバーガーをお返しに食べた

「しまった!」

「油断してるからだぞ」

こんな感じで、しばらく互いのハンバーガーを奪いあいながら俺たちは昼食をすませた

そして、しばらく優奈と服を見て回り優奈がいくつか服を買った後、デパートを出てカラオケに行ったりボウリングに行ったりして家に帰った

家の前まで着くと、優奈が俺の前に立ち

「夏樹、今日は付き合ってくれてありがとね!」

俺に、笑顔を向けお礼を言った

「別にいいよ、なんだかんだで俺も暇つぶしになったし」

「また、一緒にデートしようね!」

「え!デート!」

「あ!デートじゃなくて一緒に出かけようねって言おうとしたの!」

優奈があわてて言いなおした

「あ、ああ一緒に出かけようかビックリした」

「じゃ、じゃあね！」

優奈はあわてた様子で自分の家へと帰って行った

俺は、今日一日を振り返ってみた

一緒に出かけて飯食って、服買って、カラオケやらボウリングに行った確かにデートっぽいと言えばデートっぽいかもしれない

もしかして、これってデートだったのか？

・ そんなことを思いながら、俺も自分の家に戻って行ったのだった・

（後書き）

どうも、マロンです。

今回で短編小説も三作目となりました。コメディっぽい感じで書いたつもりですが途中からめちゃくちゃな感じになっているかも（汗）

感想や誤字訂正などありましたら連絡を頂けると嬉しいです

連載中の僕とブラコン姉妹の日常も更新していききたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1830q/>

これってデートだったのか？

2011年1月19日06時21分発行